

# 伊呂波

シテ 空海の靈

ワキ 菅好治

ワキツレ 同伴者

所 京都東寺  
時 三月下旬

ヲトコ

「か様に候者は洛陽に住居する。菅の好治と申者にて候。今日は弥生後の一日。大師御入定の会式なれば。若き人々を倡ひ東寺へ参詣仕候。

サシ  
「実や仰ぐも辱なや。四十八字の偈にいはく。

立衆  
「去ば咲花の。色は匂へど散ぬるを。我よたれぞ常ならむ。有為の奥山今日越て。あさき夢見しそひもせず。京童を始とし。我日の本の宝となり。三国伝来の。書籍に通用す。殊に言葉の其内に。無

常を進め睦しき。大慈大悲ぞ有難き。く。

詞  
「急候程に。是は早東寺に着て候。皆々かふ渡り候へ。

シテ、サシ  
「夫尺牘の書疏は千里の面目也。凡六の文は体の姿を顯はず輩。驚鸞反鵠の勢ひを習ふ人。纔に一字をなして万代の誉れをいたす。諸道に勝れし筆道。

貴みても余り有は。遍照金剛荒有難の御事やな。

ワキ  
「いかに是なる老人。御身は此辺の人か。

シテ「不思議やな。かほど群集の其中に。分て詞を懸給

ふは。何の御用の有やらん。

ワキ

「さん候。是は洛陽に住者成が。何れも手跡をたしなみ。分て大師の御筆の跡を。及ばずながら学ぶ故。道を祈りて折々は。参詣申者成が。唯今御身の詞の末に。筆道の不可思議なる事を宣<sup>たま</sup>ふは。同じ願ひの人やらんと。尋申さん其為に。そ忽に詞を懸申す。御心にあはず共。若きにゆるしおはしませ。

シテ

「扱は謊しくも手跡に心に入る人とや。我も此寺辺に年を経て。老せまりたる上にても。手跡を学び申也。皆々も信心私なくば。能書と成給はん事疑ひあらじ。たゞ怠らず学ばれ候へ。

ワキ

「実有難き御詞や。又承はれば大師は。我朝のみか漢土迄。其名隠れぬ御事よなふ。

シテ「中々の事。入唐渡天ましくて。御智恵をためさ

れ筆道をならひ。三国に御名をかゞやかし。和朝の誉れを顯し給ふ。

ワキ「御身寺辺の人ならば。猶も大師の御事を。委御物語候へ。

シテ「元来旧記にとゞまれ共。御尋にて候程に。懇に語り候べし。

クリ、同「抑大師と申は。金剛三知の薩埵にて。唐土にては恵果にま見え。天竺五台山にては。正身の文殊菩薩を拝し給ふ。淺からぬ大師にておはします。

サシ「唐土にては五筆和尚と号し。我朝にしては三跡のかみに立給ふ。

同「其頃嵯峨の天皇の御宇に叡慮として。唐土和朝の手跡をあつめさせましくて。筆道に御慮を。尽させ給ふ。

クセ「或時御門は空海を。内裏に召れ此間。異朝より名翰の。卷物朝來せり。日の本に能書多く共。異国

には及ばずと。宣旨あれば。空海は。卷物を披見ある。是は我入唐の砌に書たりしと。勅答有ければ。帝いぶかしく思召。支証有やと。叡問なされしかば。則軸を放せば。日の本の沙門空海筆と顯せり。帝猶も覺束なく。然らば此ごとく書ずして。異やうなりと宣旨有。

シテ「大師勅答ましますは。

同「漢土は大国成故に。文字も相応の形ちなりと。答

へさせ給へば。帝叡感淺からず。夫より空海を信じおはしまし。大内裏御造営。十二門の其額。南面は大師。西の三つは小野の良記。北は橘の巨勢磨。東の三つは嵯峨の帝。垂露の点を下して。

天下の眉目驚怖せり。然して小野の道風。大師の御分律を。難じて朱米と名付。嘲ける権筆を。そしる科にや忽ち。道風手ぶるひせし事。偏に誹る科とかや。心に信なき故ぞ。只正直に修行せよ。

我空海と宣ひ。御厨子に入せ給ひけり。く。

「我過去七仏より以来。番々出生し。今日域に結縁  
ふかく。其名は高野に入定し。弥勒の出世を待と  
いへ共。衆生濟度の思ひふかく。真言秘密の窓の  
前に。三密の月を澄し。螢雪にうそぶいて。書経  
に眼をさらす。有がたや。仏法流布の国なれば。  
神は高間が原に顯れ。仏は衆生の迷闇を照し。  
同「粟散辺土と人はいへども。仏法繁昌神国仏国。竺  
土も唐土も争か我朝に増らんや。頼めや憑め信受  
せよ。」

「昔日神國の御國の内に。」

同「邪の神靈を。千里の外にはらひ給へ共。其執眷属  
山々峰々嶽々に残り。閑ならず。殊に東夷西戎を  
治めん為に。魔山に分入。樹下石上に秘密を行へ  
ば。雲となり。雨となり。障礙をなせども仏力  
におされ。虚空に飛去。ならびに山上に水をふう

じ。潮海の中に清水を出し。社頭を清め。殺生をとゞめ。秋津島根の風俗を和げ。仁義の道に返る車路。とゞろく道橋をふたたび修覆し。天下泰平。国土安穏。君も豊かに民安き。真言の法味ぞ有難き。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『古今謡曲解題』丸岡桂著  
『宴曲十七帖 謡曲末百番』国書刊行会編